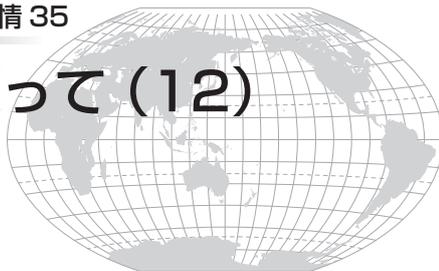


●グローバル化時代の医療・検査事情 35

世界の医学部を巡って(12)
Ⅱ アジア編 台湾

な ら のぶ お
奈 良 信 雄
Nobuo NARA

日本と親交がある国は多いが、とりわけ台湾の親日感は強い。かつて日本の統治下にあったことにもよろうが、日本の医学教育の影響が色濃く残っている。しかし、台湾ではアメリカに留学したり移住する者が多く、近年ではアメリカ式の教育を積極的に導入している。ICT技術(情報通信技術)の進歩がめざましく、英語を使った医学部教育、医師国家試験へのコンピュータ試験(Computer Based Testing: CBT)導入、2001年から始まった医学教育評価制度など、我が国より先行している部分も少なくなく、日本の医学教育改革の参考になることも多々ある。

台湾には、国際シンポジウム参加や医学教育評価制度の調査研究などで、直近の10年間で6度訪問する機会を得た。

台湾は、面積が九州よりもやや小さな3万6千平方キロメートルほどで、人口は約2,360万人(2020年2月)である¹⁾。首都は台北にあり、電子・電気製品、化学製品、鉄鋼金属、機械製品などのハイテク産業が活発に行われている。三民主義(民族独立、民権伸長、民生安定)に基づく民主共和制が敷かれ、五権分立(行政、立法、監察、司法、考試)が確立している。考試の分立は独特で、後述する医師国家試験は考試院が所管している。

台湾の歴史は複雑だ。かつては東南アジアから渡来してきた原住民が台湾島に居住していたが、15世紀末頃から、オランダとスペインによる植民地支配を受けた。オランダは台湾南部、スペインは台湾北部を主な拠点としたが、1642年にはほぼオランダの支配となった。17世紀には中国大陸から漢民族が移住するようになり、1662年には鄭成功がオ

ランダを追放して東寧王國を設立した。その後、清が同王國を破って台湾島を併合した。1895年に日清戦争が終結するとともに下関条約が締結され、台湾は日本の台湾総督府によって統治されることになった。

一方、中国大陸では、1911年に辛亥革命が起こり、1912年に清国が滅亡し、孫文が率いる国民党政府による中華民国が誕生した。孫文は病に倒れ、その後は蒋介石が国民党政府の総統となった。第二次世界大戦後の1945年、中華民国は台湾にある日本の統治機構を接収し、台湾省として自国の一部に編入した。

さらに、中国国民党と中国共産党間で中国大陸の国内統一を争う国共内戦の末、中国共産党が勝利して1949年10月1日に中華人民共和国を建国した。敗北した蒋介石率いる国民党政府は1949年12月7日に台湾に逃れ、現在に至っている。

20世紀後半から台湾は急速な経済成長及び工業発展を遂げ、今日の繁栄を誇る。ただし政治面では、大陸の中華人民共和国との軋轢が解消しないままである。

I. 教育制度

①就学前教育

入園義務はないものの、都市部ではほとんどの小児が幼稚園に通っている。公立幼稚園は、就学前教育として国民小学校に併設されることが多いが、全体の3割程度に過ぎず、私立幼稚園が7割を占める。入園の対象年齢は3～5歳で、公立が月額4,000台湾元程度、私立が月額約10,000台湾元の費用負担

になっている。就学率は約 59.19%とされる(2016 年度)²⁾。

II. 義務教育

国民教育は、義務教育とされる国民小学校 6 年間と国民中学校 3 年間、および 2014 学年度からは高級中学校(高等学校) 3 年間の計 12 年間から構成される。国民中学校以降は、高級中学校(3 年制)、高級職業中学校(3 年制)、5 年制専科学校(5 年制)があり、さらに大学(4 年制)、技術学院(4 年制)がある。台湾での進学熱は高く、高級中学および高級職業中学から大学への進学率はそれぞれ約 95.80%、79.33%になっている。

国民小学校から国民中学校までの授業料は無料で、2016 年度からは高級職業中学校の授業料も無料になり、教育の普及が進められている。普通高級中学校については、1 世帯の年収入が 148 万円未満の場合、授業料が無料になる制度になっている。

III. 医療制度

台湾の医療体制は、政府の衛生福利部によって管

轄されている。2013 年時点で、公立医療機関が 81、民間医療機関が 414、診療所が 42,436 あり、人口 1,000 人に対して医師が約 2.6 人、看護師および助産師が約 6 人、病床数は 6.8 程度である³⁾。

全民健康保険(NHI: National Health Insurance)が 1995 年に導入され、加入率は 99 パーセント以上と高く、実質的には国民皆保険として機能している。ただし、企業グループが民間医療機関に参入するなど、民間資本の積極的な投資も活用されている。

国民の平均寿命は 2015 年で約 77.98 歳で、高齢化が問題になりつつある⁴⁾。

IV. 医学教育制度

日本統治時代の 1895 年に台湾病院(現在の台湾大学付属病院)が運営を開始し、日本から医師、薬剤師、看護師が派遣された。1898 年には台湾総督府台北医院と改称された。また、1899 年からは台湾総督府医学校として医学教育が開始され、後に台湾総督府医学専門学校、台北医学専門学校、台北帝国大学附属医学専門部と改称されて今日の台湾大学医学部に至っている⁵⁾。

現在、台湾には 13 の医学校がある(表 1)⁶⁾。こ

表 1 台湾の医学部

設立年	医学部名	国立/私立
1897	台湾大学医学院 National Taiwan University College of Medicine	国立
1901	国防医学院 National Defense Medical Center	国立(軍系)
1954	高雄医学大学 Kaohsiung Medical University School of Medicine	私立
1958	中国医药大学医学院 China Medical University School of Medicine	私立
1960	中山医学大学医学院 Chung Shan Medical University School of Medicine	私立
1960	台北医学大学医学院 Taipei Medical University School of Medicine	私立
1974	阳明大学医学院 National Yang Ming University School of Medicine	国立
1984	成功大学医学院 National Cheng Kung University College of Medicine	国立
1987	长庚大学医学院 Chang Gung University College of Medicine	私立
1990	辅仁大学医学院 Fu Jen Catholic University College of Medicine	私立
1994	慈济大学医学院 Tzu Chi University College of Medicine	私立
2009	马偕医学院 Mackay College of Medicine	私立
2013	义守大学医学院 I-Shou University School of Medicine for International Students	私立

のうち4校は国立大学で、9校が私立大学である。年間の卒業生は約1,300人である。教育年限は2013年以前は7年であったが、以降は6年制に変更されている。

僕が初めて台湾に招待されたのは2011年で、このときは7年制を日本のように6年制にするか、またアメリカ式の学士入学にするか白熱した議論が戦わされていた。そこで医学教育制度の方向性を決めるべく、アメリカ、オーストラリア、日本、韓国からの専門家を招いて国際シンポジウムが、開催された(写真1)。僕はシンポジウムで日本の医学教育制度の現状を紹介し、かつ学士入学制度への全面移行は想定されていないことを講演した。

活発な議論の末、医学教育は6年制に変更され、かつ従来通りの高級中学卒業生を主に入学させるシステムが確立された。この意味では、日本の医学教育制度と同様になったと言えよう。なお、7年制は、日本に1946年から1968年まで実施されていたインターン制度を6年の医学部教育に組み入れたことに基づく。日本で50年以上も前に廃止されたインターン制度を中止すべきかどうか論点になったわけだが、ようやく6年制に変更されたことになる。

なお、高雄醫學大學のように、高級中学卒業生だけでなく学士を入学させている医学部もある。また、2013年に新設された義守大學(I-Shou University School of Medicine for International Students)では、

台湾国民ではなく、海外からの学士を入学させて4年間で教育している。しかも、卒業後は台湾で医師になることはできず、祖国に戻って医師になるシステムになっている。

輔仁大學醫學院では台湾語で教育されているが、他の医学部は英語と台湾語で教育され、義守大學では英語のみで教育されており、グローバル化への対応が意識されているようだ。実際、台湾の医学生と話をする機会もあったが、彼らの英語力はネイティブかと思われるぐらいに秀逸である。各医学部の定員は80～150名程度である。

V. 医学部訪問

台湾では台北醫學大學と國防醫學院の医学部を訪問した。

①台北醫學大學

1960年に設立された私立の医科大学で、医学部、口腔医学部、看護学部、公衆衛生学部に9学科がある。医学部には医学科の他、呼吸治療学科という台湾随一の学科が設置されている⁷⁾。台北市にあり、約6,000名の学生が学んでいる。アジアのトップ100大学に入っているという自負があり、国際化に注力している(写真2)。

カリキュラムは2013年以前は7年制であったが、現在では6年制になっている(表2)。



写真1 医学教育改革に関する国際シンポジウム(台北醫學大學にて)

台北醫學大學では、2011年の国際シンポジウムに続き、2014年には世界医学教育連盟西太平洋地区会議 (Association for the Medical Education in



写真2 台北醫學大學

the Asian Pacific Region: AMEWPR) に招待され、日本における医学教育評価制度の準備状況について講演した(写真3)。

儒教の教えが浸透している台湾では、わが国で忘れられかけている義理と人情がしっかり残っており、国際シンポジウムでは海外招待客に対して豪華なおもてなしをしてくれた(写真4)。

因みに儒教の教えは地下鉄でも垣間見られる。地下鉄の車内には日本のシルバーシートに当たる「博愛座」が、端っこでなく各車両の真ん中あたりに必ず設置されている。日本のシルバーシートには若者が我がもの顔で座り、高齢者がその前にぼつんと立っている光景をよく目の当たりにする。が、台湾

表2 台北醫學大學カリキュラム

第1学年：教養科目
必修：歴史、物理学、化学、生物学、心理学、生化学、有機化学、英語、生物統計学、基礎コンピュータプログラミング、基礎人工知能、医学研究入門 etc.
選択：音楽、芸術、睡眠科学、医学入門、早期体験実習、国際医療、分子生物学、文献検索 etc.
第2学年：基礎医学科目
必修：医療倫理、生化学、生理学、微生物学、免疫学、疫学、人体の構造と機能総論、筋骨格系、呼吸・循環系、神経系、消化器系、泌尿生殖系、内分泌系、寄生虫学、PBL(生化学、解剖学、生理学) etc.
選択：社会医学、救急初期対応、伝統医学、ゲノム・プロテオミクス、早期体験実習、バーチャル体験臨床実習、経営哲学、文献検索 etc.
第3学年：基礎医学、臨床医学科目
必修：医史学、解剖学、病理学、薬理学、公衆衛生学、整形外科、呼吸器病学、循環器病学、消化器病学、総合医学序論、EBM etc.
選択：早期体験実習、PBL(微生物学、免疫学、寄生虫学、公衆衛生学)、中国医学、文献検索 etc.
第4学年：臨床医学科目
必修：神経病学、血液学、腎泌尿器科学、産婦人科学、内分泌疾患、精神疾患、小児科学、老年病学、救急医学、外科学、内科学、臨床技能、医療法制 etc.
選択：鍼治療、法医学、臨床心電図、超音波補助解剖学、早期体験実習、PBL(臨床医学)、文献検索、睡眠医学 etc.
第5学年：インターンシップ
第6学年：インターンシップ
(註)PBL：problem-based learning 問題解決型学修 EBM：evidence-based medicine 根拠に基づく医学



写真3 世界医学教育連盟西太平洋地区会議 (台北醫學大學にて)



写真4 歓迎晩餐会 (台北醫學大學)

の博愛座には、車内が混雑していようが、若者が座ることは決してない。空いているのなら座ってよいのではないかと思ってしまうのだが、そこが先輩を敬えとの教えらしい。

もっとも、ICT技術の進んだ台湾では、若者が博愛座に座ろうものなら、すぐさまユーチューバーの餌食となり、周囲から笑いものにされてしまう、との理由もあるようだ。

②国防醫學院

国防醫學院は1901年に設立され、三軍総病院を擁して医学部教育を担当している(写真5)。三軍とは、陸、海、空軍を意味しており、まさしく軍医を育成するミッションを担っている。6年制の医学部教育で、カリキュラム構造は台北醫學大學とほぼ同様である⁸⁾。

ただし、国防醫學大學ならではの、身体鍛錬、指揮訓練、射撃訓練、軍事科学、核-生物-化学兵器など、軍医になるための教育が必修科目として追加されている。さらに国際化を意識して、高い英語能力の獲得を義務づけている。台湾で実施されている英語能力試験 General English Proficiency Test

(GEPT)で、2年次の第2セメスター前に中等度以上の高得点をとることが要求される⁹⁾。もしも合格しない場合には、英語の上級コースを受講して、しっかりと学修した上で合格点を取らなければならない。また、国際的な英語能力測定試験で高得点を取得することも推奨されている(表3)。

2014年6月に開催されたAMEWPR会議の席上で、国防醫學院の医学部長から講演を依頼された。日本でありがちな社交辞令だろうと本気にしていなかったが、その年の9月に、日本の医学教育の現状について講演するよう依頼がきた。さすがに行動力がある。さらに、2019年10月には、医療倫理教育に関する国際シンポジウムに招待され、カナダ、韓国の専門家とともに参加した(写真6)。2回の講演とも、シンポジウム前日に豪華な晩餐会で歓待された。もともと迎賓館として建てられた圓山大飯店では、海外招待客とともに医学部の主要メンバーが参列した(写真7)。

学校長は中将だそうで、大将に事あるときは軍の指揮をとらなければならない、そのために日々身体を鍛錬しているとのことであった。学校長が来場する



写真5 国防醫學院



写真6 医療倫理教育に関する国際シンポジウム
(国防醫學院)



写真7 圓山大飯店での晩餐会

表3 国防醫學院英語能力判定

国際的英語能力試験	スコア
Test of English as a Foreign Language (TOEFL)	
paper-based tests	550
computer-based tests	213
iBT	8
International English Language Test (IELTS)	6
Test of English for International Communication (TOEIC)	850
Foreign Language Proficient Test (FLPT)	70
American Language Course Placement Test (ALCPT)	85

までは参加者はわいわいと雑談に花を咲かせていたが、彼が会場に姿を現した途端、一斉に起立をして敬礼したのは、流石に驚いた。さらに彼が乾杯の発声をするたびに杯を飲み干すのが礼儀だそうで、段々と酔いが回ってしまった。

僕にとっては晩餐会だけで十分に感激したが、講演終了後には小籠包で有名な鼎泰豊での会食に誘われた。日本でも有名な店で、入り口には、案の定、日本人が列をなして待っていた。晩餐会だとフォーマル感が否めないが、鼎泰豊ではシンポジウムが無事に終わった安堵感も手伝い、全員が羽目を外す始末だった（写真8）。

なお、2021年5月15日に台北で開催される国際シンポジウムにも招待された。ところが、新型コロナウイルス感染症が終息しないため、あいにくオンライン形式での会議になった。さらに追い討ちをかけるように、新型コロナウイルス感染の征圧に成功した模範国とされた台湾でも、4月以降患者が急増し、オンライン会議そのものが中止になった。すでに講演資料を作成して送っていたこともあるが、中止の非礼をわびて、記念品と謝礼が送られてきた。そこまでもなくとも……。

VI. 医師国家試験

五権分立が確立している台湾では、すべての公務員の人事を考試院が管轄している（写真9）。日本の人事院に相当するのだろうが、公務員の採用試験や任用、管理等の人事管理を行っている。考試院は、消防士試験、船舶運転免許試験など、あらゆる国家試験の一切を引き受けている。当然ながら医師国家

試験も考試院の管轄にある。そして道路をはさんで考試院の目の前にある試験会場では、連日のように何らかの国家試験が実施されている。当然ながら専任の職員が配置され、同じ試験会場を使用することで会場設営や運営に無駄がない。

縦割り行政で国家試験が実施されている日本に比べ、考試院が国家試験を一手に担当しているがゆえに、試験システムの共有は簡単で、開発が進んでいる。日本の医師国家試験はいまだに紙ベースだが、アメリカやカナダではコンピュータ試験（CBT）で試験が実施されており、台湾でもすでにCBTに移行している。CBTの長所として、試験の管理が容易で、動画を取り入れた試験などが可能、採点も迅速に行えるなどがある。

日本でも効率化、さらに動画の導入などを含め、国家試験へのCBT導入が検討課題になっている。そこで、厚労省の委託を受けて、台湾におけるCBTの長短を調査に訪れた。日本に比べて人口が少ないために導入しやすいのかもしれないが、医師国家試験でのCBTは、トラブルもなく、うまく稼働していた。

ところで、試験が順調に実施されていることを確認するために、部長が視察に来た。会場を回る際、日本なら会場のスペースを考え、受験生に邪魔にならない配慮をしつつ、順不同で回るだろう。が、儒教の国らしく、職位の順序を厳守するのがルールだ。まずは部長が先頭に立ち、次いで海外からの招待者である僕、その後ろに、課長、係員の順で、金魚のフンよろしく、一列行進で巡視するのだった。ついうっかりコンピュータ画面を覗きこもうと部長の前に出た途端、すぐさま注意されてしまった。



写真8 鼎泰豊での会食



写真9 考試院

Ⅶ. 医学教育評価

僕が日本医学教育評価機構（JACME）を立ち上げるに当たり、先行する海外における評価制度を調査研究することから始めた。台湾には医学院評鑑委員会（Taiwan Medical Accreditation Council: TMC）が医学教育評価を担当している。アメリカに移住する台湾の医学部卒業者が多いことから、台湾の医学部ではアメリカと同等の医学教育を行っていることを保証すべしと、アメリカの国外医学教育認証委員会（National Committee on Foreign Medical Education and Accreditation: NCFMEA）が通告してきた。

1998年のNCFMEAの評価では、「台湾の医学教育制度はアメリカに劣る」とされた。その理由は、台湾では医学教育評価制度が確立されていないことにあった。この指摘に危機感を感じた政府の教育部が、医学教育評価機関を設置するよう企画し、2000年に医学部を評価する機関としてTMACが発足した。TMACは政府の教育部、医学部長会議、国家衛生研究院から支持され、国家教育研究院の7階にある（写真10）。TMACは7年周期で医学部を評価し、認定している。

TMACへの訪問では、頼其萬前会長（写真11の右から3人目）、林其和現会長（写真11の左から3人目）らと意見を交換し、評価制度、評価基準、評価員養成などについて情報を得た。

TMACの評価制度を参考にして日本医学教育評価機構（JACME）は2015年に発足し、世界医学教育連盟（WFME）から2017年に認証を受けた。TMACは日本よりも15年も先行していたが、WFMEの認証は2019年で、先を越してしまった感じで、いささ

か気が咎める。とはいえ、以来、TMACとは交流は今でも続いており、2020年のTMAC設立20周年記念式典には祝辞を送った¹⁰⁾。

Ⅷ. 台湾紀行

2010年の日本医学教育学会でのこと。休憩室でコーヒーを飲みながら電子メールを確認していたら、やおら、白髪の実直そのものの紳士が、意を決したような面持ちで話しかけてきた。「来年に台北で開催する国際シンポジウムに来てくれませんか？」とのこと。顔かたちでは一瞬分からなかったが、英語で話してきたところをみれば、日本人ではあるまい。聞けば、高雄医科大学で解剖学を教えている劉克明教授（写真11の左から2人目）だった。

シンポジウムのテーマは「学士入学制度の導入について」で、僕がメディカルスクール構想の調査研究を当時行っていたことから、世界の趨勢を踏まえて日本の実状を報告してほしいとの要請だった。もちろん専門分野であるし、台湾には行ったこともなかったので興味があり、断る理由など見当たらない。スケジュールを確認した上で快諾した。

僕が「Okay!!」と発した途端、彼の表情はすっかり明るくなり、大役を果たしたとばかり、肩の荷が下りた様子になった。おそらく台湾の医学教育学会から全権を委ねられて来日したのだろう。劉教授は何度もお辞儀をして礼を言い、台湾に帰っていった。

台湾人は、義理と人情が厚く、東日本大震災のおりも、世界に先駆けて台湾が見舞金を送ってきてくれた。

歴史を紐解くと、台湾は中国本土との政治関係が複雑だし、15世紀末以降、スペイン、オランダ、



写真10 国家教育研究院



写真11 台湾医学院評鑑委員会（TMAC）

中国本土の漢民族、そして日本など、各国の統治を受けてきた。日本の統治下にあったことに、台湾の人びとは快く思っていないに違いない。

が、豈図らんや、それは完全な誤解だった。それ以前の統治国に比べ、日本は台湾に鉄道を作ったり、荒地を開拓するなど、台湾の文化向上に随分と貢献してくれたと感謝の念がある。とりわけ1930年に烏山頭ダムを建設して台湾最大の穀倉地帯を開拓した八田與一は、今でも台湾人の心の拠り所になっている。教科書にも記述され、台湾人なら誰もが知っているようだ。こうした事実を台湾人はいまだに忘れず、日本への恩義の念が脈々と続いているようだ。

シンポジウムの開催は2月。亜熱帯の台湾だからさぞ暖かいだろうと期待して乗り込んだ。が、意外や意外。驚いたことに寒い。その上、雨にも見舞われた。それでも初めての台湾だ。二度と訪れる機会はないかも知れないと腹をくくり、できるだけ足を伸ばすこととした（以降、あわせて5回も台湾を訪れることになるうとは!?）。シンポジウムの合間を縫い、観光客よろしく名所旧跡を訪ね歩くこととした。

早速、映画ロケの舞台となった九份へ。押し寄せる波のごとく、通勤バイクが横一列になって走る台北市内を抜け、バスで一時間ほどトコトコ。市内を外れると、ローカル色豊かに道は段々と細くなる。山道を抜けて着いた九份では、くねくね続く細い石段の坂道の両脇に、土産物やらウロン茶を売る店、食堂など、小さな店が肩を寄せ合うように並んでいる（写真12）。1989年に台湾映画「非情城市」の舞台になったことで有名らしいが、不覚にもそのよう



写真12 九份

な映画は知らない。

だが、2001年に公開された「千と千尋の神隠し」のモデルになったといわれていると聞けば、ガッテンガッテン。魔女の湯婆婆がいかにも出てきそうな雰囲気だ。不気味な佇まいに加え、あいにくの小雨で寒さが身に染み、小さな茶店に逃げ込んだ。そこで食べた麺はことのほか美味しかった。人間誰しも、美味しいものにありつくと幸せな気分になる。

台北には観光スポットが多い。台湾建国の祖、蒋介石を祭る中正紀念堂がある自由広場は25万平方メートルもあり、正面には高さ30メートルにもなる自由広場門がある（写真13）。自由門から入ると、これぞ中華風といった建物が威風堂々と並ぶ。

奥に進むと青い瑠璃瓦の屋根に白い大理石で作られている中正紀念堂がある（写真14）。紀念本堂の面積は約1.5万平方メートルで、建物の高さは70mに及ぶ。本堂には花崗岩の白い階段が84段あるが、正面の階段にある5段を加えると89段になり、これは蒋介石の享年である89を表しているようだ。



写真13 中正紀念堂自由廣場門

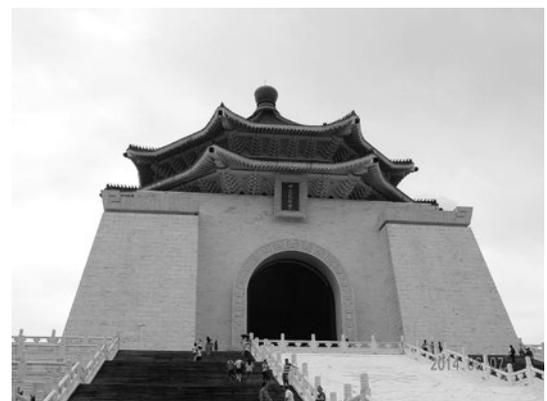


写真14 中正紀念堂

国民党総裁として使用していた邸宅の名残だ。彼の使っていた机やタイプライターなどが陳列され、往時が偲ばれる。広い庭園には蘭やバラなど整然と植えられ、ここかしこに聞こえる鳥の鳴き声の中で、自然を愛でながら執務をしたのだろう。ビルの谷間で仕事をしなければならない僕としては羨しい限りだ。

国民党が中国本土を脱する際に持ち出した中国の国宝を展示した故宮博物館は、見応え十分だ(写真19)。歴代中国皇帝の62万点ものコレクションが収蔵されている。西周後期の作とされる青銅器の毛公鼎の内側には、条文らしき文章が綴られている。その文字が描かれた赤色のネクタイを劉教授からプレゼントされたが、いまだに解読できていない。

玉器彫刻は古来珍重され、清の時代に作られたという白菜をイメージした翠玉白菜が有名だ(写真20右)。精巧に彫り上げられたミニ白菜とキリギリスは、とても石細工と思えない。豚の角煮を模した肉形石も、色といい、滑らかさといい、すぐにでも口に入れたくなるような錯覚すら感じさせる(写真20左)。



写真19 故宮博物館



写真20 翠玉白菜と肉形石

このほか、数々の青銅器、陶磁器、絵画、書、彫刻などが所狭しと並べられ、中国3000年の底力には恐れ入るしかない。

台北中心部から地下鉄で40分ほど北上すると淡水に行ける。淡水には赤レンガで覆われた紅毛城がある(写真21)。紅毛城は1626年にスペイン人によって創設され、その後オランダ人の手によって改修され、アントニー城と改称された。かつて、台湾人はオランダ人を赤毛と呼んでいたため、後に「赤毛城」と名付けられたようだ。さらに、イギリス人によって占領され、1980年になってようやく台湾に返還された。

紅毛城の近くには真理大学があり、台湾における西洋式教育の発祥地とされる。キリスト教布教のために台湾を訪れたカナダ人牧師 George Leslie Mackey が開校し、緑の多いキャンパスに学生達が勉学に励んでいた。淡水には2009年に設立された馬偕醫學院もあり、この医学校も Mackey に因む。夕食は100年以上の伝統がある赤煉瓦のレストラン「紅樓」で、夕日を眺めながら美味しい台湾料理を楽しんだ。

マグマの上にある薄皮状態の地球には、どこを掘っても温泉が湧き出る。ご多分に漏れず、台北の北部にも北投温泉がある。元々はドイツ人が発見し、その後は温泉好きな日本人が開発したようだ。日本の鄙びた温泉よろしく、温泉宿がいくつかある。その中でもひととき目立つビルがあった。その名も「加賀屋」。エッ? 和倉温泉の有名な旅館が出店しているようで、着物をぎこちなく来た台湾女性が整列して「イラッシャイマセ!!」との出迎え。取って付けたような印象で、若干の違和感があった。とはいえ、温泉は硫黄泉で泉質がよく、ゆっくり温泉につ



写真21 淡水にある紅毛城

ることができた。

台北にはこのほか、孔子廟（写真22）、龍山寺、行天宮、二二八和平公園、猫空ロープウェイ、509mというビルとしては世界12位の高さを誇るTAIPEI101など、見所はまだまだある。

TAIPEI101は101階建てを示す単純な名称だが、あまりの高さに近くから全景をカメラに収めるのは難しく、遠く離れた繁華街からシャッターを切った（写真23）。ついでながら市内には“牙醫”の看板がやたら目に付く。歯医者のおかげで、日本ではコンビニ数よりも歯科医院が多いと聞かすが、どうやら台北でも同じなのかしら。また、日本のクロネコをもじった(?)のか、パンダマークの宅配トラックが走っていた。

市内で信号待ちしていると、いきなり小学生らしき男の子が僕の手をつかみ、道を尋ねてきた(らしい?)。もちろん、彼の言葉は中国語!!チンブンカンブンの顔をしていると、男の子はやっと誤りに気づいたらしく、バツが悪そうにお辞儀をして去って

いった。どうやら僕は中華系に見えるのかも。そういえば、街の中で親類(?)が経営しているらしい看板に出会った(写真24)。火鍋料理の店ではなく、「小火鍋特價120元」と書かれた文字を見ると、鍋そのものを扱っている店のような。もちろんドアを開いて挨拶する勇気はさすがに持ち合わせていなかった。

台湾で外せないのが、夜市。車を通行止めにした大通りを挟み、露店がどこまでも並ぶ(写真25)。日本の昔にもあった夜店を思い出させるブンゼン灯の匂いの中、裸電球に照らされてブタの足、トリの丸焼き、水餃子、カエルの卵みたいなその名も青蛙撞ナイ(タピオカミルクティー)、そのほか何物かよく分からない食物が所狭しと売られている。若干衛生面に不安を覚えたものの、熱気に押され、ついゲットした。もちろん、“早い”、“安い”、“うまい”!!もともと、美味しいと思ったのは、きっと雰囲気



写真22 孔子廟



写真24 奈良一本鍋店



写真23 台北市内。台湾101を望む。
牙醫が目立ち、パンダ宅配が走る。



写真25 寧夏路夜市



写真 26 TAIPEI EYE での京劇「孫悟空」



写真 27 台北ダックを切り分けるシェフ

なせる業だったろう。

その後、夜市から歩いて TAIPEI EYE 劇場で京劇³⁾「西遊記」を楽しんだ(写真 26)。日本でもよく知られた孫悟空を演じる出し物だが、音楽に合わせて中国雑伎団よろしく、軽快に飛び跳ねるさまには拍手喝采。

さて、中華料理と言えば北京ダック。高級ホテルで開催された晩餐会でも、シェフがしずしずとメイン料理のダックを持ってきて、招待客に切り分けた(写真 27)。思わず、「Is this Beijing duck?」と聞いてしまった。途端にシェフは血相を変えて首を大きく横に振り、「No, this is Taipei duck!!」と来た。ソダネ～。

文 献

- 1) 外務省資料
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html>、最終アクセス2021年4月30日
- 2) 外務省資料、台湾の学校事情
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01as
- 3) 明治大学国際総合研究所、ドゥリサーチ研究所：平成26年度新興国マクロヘルスデータ、規制・制度に関する調査(台湾)
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/iryuu/downloadfiles/pdf/macrohealthdate_Taiwan.pdf 最終アクセス2021年4月30日
- 4) 中村努：台湾における医療供給体制と公平性確保に向けた政府の役割。経済地理学年報 62：210-228、2016
- 5) 王敏東：台湾の医学に影響を与えた日本人—耳鼻咽喉科の場合—、日本医史学雑誌54 巻第3号；275-280、2008。
- 6) World Directory of Medical Schools
<https://search.wdoms.org/> 最終アクセス2021年4月30日
- 7) 台北醫學大學ホームページ
<http://eng.tmu.edu.tw/> 最終アクセス2021年4月30日
- 8) 國防醫學院ホームページ
<https://www.ndmc.ndmctsggh.edu.tw/uniten/100003/2676>
- 9) 國防醫學院カリキュラム
https://www.lttc.ntu.edu.tw/E_LTTC/E_GEPT.htm
- 10) TMAC 20th Anniversary Special Issue
<https://www.heeact.edu.tw/40225/40231/42956/> 最終アクセス2021年4月30日